
デジキャラット・シンフォニー4

細川智仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジキャラット・シンフォニー4

【Nコード】

N3098T

【作者名】

細川智仁

【あらすじ】

この本は、私が愛知万博の頃、2005年夏から1年間にわたって書き下ろした「デジキャラット・シンフォニー」の4部作をまとめて再編集したものです。

でじこの前にローゼンメイデンのドールたちが現れます、その目的は……。

46、焼け野原の町で

こうして各取締役はそれぞれの任地へ戻っていった。

大阪は町の3分の1が灰になり物価の高騰が始まったが、でじこの悪口を言う大阪市民は誰もいなかった。火は京都タワーからも見えしたが、京都は落ち着いたものだった。豊富な水資源と食材によるものだろう。

「いつまでこんな味のない料理を食べてなきゃならないんだによ」

「納豆もないにゆ」

「でじこおねえちゃん、京都の料理の値段知らないぴよ……。でじこおねえちゃんたちが食べている料理は一人前5000円以上するぴよ」

「こんな味のない料理がそんなに高いのかによ？」

「でじこちゃん、それは本当の話だよ」

「によ？味もないのにどうしてそんなに高いのかによ？」

「でじこちゃん、京料理は舌で味わうものではない。香りを楽しむものなのだよ……」

「これはそんなにぜいたくなものですかによ？」

その日、でじこは大阪に向かうことにした。上本町にある平田先生の銅像が心配だったのだ。うさだは止めようとしたが、美香が自宅が心配と行ってでじこを連れて行った。でじこたちは被害の少なかつた京阪電車に乗って三条から天満橋まで行った。天満橋から地下鉄で上本町までいける、ようやくたどり着いた上本町駅は建物自体は残っていたものの壁が黒くすすけていた。

「これが平田先生が「光の駅」とまで言っていた上本町ですかによ……」

周りの建物もことごとく壊され、駅の隣の「ハイハイタウン」のみが辛うじて残っていた。

しかし、駅の南側にあつた平田先生の銅像はちゃんと残っていた。でじこが平田先生の銅像の前に立つと、一人のおばあさんが声をかけてきた。

「でじこちゃん・・・」

でじこはその顔に見覚えがあつた。それはかつてでじこを助けてくれた平田先生の妹、信子さんだつた。

「信子さん・・・。」

信子さんは上本町に運ばれた兄、道明の銅像を見に来ていてたまたま今回の大騒ぎに遭遇したと言う。

「でも、兄上をうらむ大阪市民は誰もいませんでした。それどころか大火は上本町にも迫りましたが、みんなが一生懸命銅像に水をかけたりして兄上の銅像を守ってくれたのです」

「平田先生は大勢の人にされたわれているんだによ」

「兄上は生前でじこちゃんに大阪を立て直してもらつた考えだつたようです」

その言葉を聞いたでじこは驚いた。

「なんですって？でじこさんを総理大臣にするのはマスターの悲願のほうですわ」

「おそらく兄上はそこまで大きくは考えていなかったのではないのでしょうか？確かに兄上はでじこちゃんを政治家にすることは考えておりました。でもそれは知事程度のものでしたでしょう。でじこちゃんを総理大臣にするのはおそらく久弥が考えたことだと思いません。兄上も立派な歴史学者でしたが、久弥は兄上以上に頭のいい子でした。都知事だつた久弥のことですから知事くらいではでじこちゃんでは小さすぎる、知事では世の中を変えるには限界がある。多少の無理は承知でもでじこちゃんを総理大臣にして世の中を変えることを考えたのでしょう。それには自分の考えを自分の考えとしてではなく権威のある兄上の遺志として広めたのです」

「そんなこと放っておいていいのですか？」

「兄上は生前久弥についてこう言っていました」

「久弥、あれは頭が良すぎる。平和な時代ではちと心配だが、あれは私とは違う歴史学を作っていくだろう。私は教え子たちに歴史を教えてきたが、またそれがお国のためになっていったのだ。学者の子が学者になる必要はない。久弥にはお前も歴史が好きなのであれば私のやり方を引き継ぐことなく何か別の仕事を考えてみるがいいと言っている。だから私は久弥には学者ではなく外国に勉強に行かせたりして最後は政治家にした。それも結局はお国のためになった。久弥は最後にはとんでもない高い地位につくはずだ。私でさえ得ることのなかった名声も残すだろう。だから久弥が何をやるうとも私は口は出さないで金は出すようにしている。しかし親としての責任は取るので久弥には好きなことをやらせてあげて欲しい……」
そうして信子さんはでじこの目を見た。

「久弥の考えが分かるような気がします。久弥はでじこちゃんを豊臣秀吉にする気だったのでしょうか」
それを聞いた一同は驚いた。

47、でじこと太閤秀吉

「でじこを秀吉にするなんてむちゃくちゃよ！」

「さすがは久弥さんによ、でじこのあふれる才能を見抜いていたんだによ」

うわさはその日のうちに大阪中に広がり、でじこは平田先生が予言した太閤秀吉の生まれ変わりだと言うつわさが広まってしまった。

その日からでじこは豊臣秀吉の伝記を読み漁るようになった。秀吉はでじことは出自は逆だが性格や考え方はよく似ていることが分かった。伝記読みがひと段落すると、でじこは外へでた。

「あれは何を配っているのですかによ？」

「新聞号外だ」

「ただでもらえるならでじこももらうによ」

でじこは号外をもらってくると、邦俊に見せた。その見出しを見た邦俊は驚いた。

見出しには「阪急電鉄倒産」とかかれていたからだ。

「なんですとによ？でじこが助けたはずの阪急電鉄がつぶれたのかによ？」

でじこたちは驚いて梅田へ向かった。でじこが美香さんの頼みで宝塚歌劇団を救済した時に親会社の阪急電鉄ごと国有化したのである。その時阪急東宝グループを解体してそれぞれの会社の株を全て国有化した。これは邦俊がそうしろとでじこに言ったからであった。つまり阪急電鉄の倒産は株主であるでじこにも影響が及ぶのである。梅田の阪急電鉄本社にでじこが入るとマスコミが群がったがこれかわわしてビルの中に入った。でじこたちが社長室に入ると見覚えがある顔があった。

「飲んだくれの知事さんによ」

久弥の親友で長野県的小林虎次知事がいたのだ。頭はいいが飲んだくれの知事だった。

「この度は弟が馬鹿な真似をしまして……。」

阪急電鉄の社長は小林知事の弟の小林春雄であった。小林春雄は阪急電鉄が国有化されて経営が安定したのをいいことに、あちこちの駅を建て直ししたり設備投資に多額の金をつぎ込んだ。さらには無理なスピードアップによる事故の続発などで経営が大幅に悪化したのだ。イメージアップして経営の建て直しを図ろうと梅田駅の全面建て直しを決定。コンコースを解体したのだ。だがこれが美香をはじめ多くの沿線住民から総スカンを食らってしまったのだ。でじこはいきなり小林兄弟に目からビームを発射した。

「バカッタレ！おまえらいったい何をやっていたんだによ！」

「必ず会社を再建しますから……。」

「信じられるわけないによ。邦俊さん、なんかいい方法ないのにかによ？」

「いい方法？」

「会社をつぶしたこいつらに責任取らせて制裁するによ！」

「そうだな……。一つ方法があるぞ」

「何だによ？」

「でじこちゃんが大阪地裁に阪急電鉄の破産を申し立てるのだ」
小林兄弟は真つ青になった。

「そうすれば小林兄弟は全財産を失う。阪急電鉄は完全にこの世から消滅する」

「いい考えだによ、早速やるによ！」

「でじこ様、どうかそれだけはご勘弁を・・・」

そこへ一人の男が現れた。東宝の松岡正通副社長である。

「松岡さん、どうやって生き返った？」

松岡は自分が起こした反乱の失敗の責任を問われたが、でじこことびよこが王様にとりなしたおかげで罪を問われずに済んだ。松岡はそれに感謝し何かお役に立てることをしたいとでじこに申し出たため邦俊の発案で国有化した東宝の副社長の座に着いた。なお、社長は阪急の小林社長が兼任している。

「松岡君、いい所に来てくれた。この子供たちがとんでもないことを言い出してきたんだ」

「何ですか？」

「阪急電鉄は今朝方民事再生法適用申請をしたのだが、こいつらは阪急電鉄の破産申し立てをやるとか言っている。何とかならんか？」
松岡はでじここと邦俊の前に進むと、ひざまづいてお願いした。

「阪急電鉄の破産申し立てを行うとか？」

「そうによ、こいつらには責任を取ってもらおうによ！」

松岡は深々と頭を下げて言った。

「でじこ大臣、ぜひその破産申し立て、私と東宝株式会社も仲間に加えてください！」

これを聞いた一同は驚きの声を上げた。

「ちよつと、松岡君。社長の私を見殺しにする気かね？」

「往生際が悪すぎますぞ。小林社長。小林社長はもちろん知事も責任を問われて当然です」

「なに？」

「知事は先ほど弟の小林社長の非をお詫びしましたが、その前になぜ小林社長をいさめて止めなかったのです。過剰な設備投資やめちやくちやな列車運用、さらには長年みんなに親しまれてきた梅田駅のコンコースを取り壊すときになぜいさめて止めなかったのです。一つでも止めていればこんなことにはならなかった。こうなったのはこうした積み重ねがあつたからです。私もでじこ大臣の阪急東宝グループ国有化のとき財産を失つたから、これは大変なことをしてくれたいと思わないでもなかった。しかし結局はこれでよかつたと思つている。なぜなら無一文になつて再出発したらいろんなものが見えてきたし、株を取り上げられても結局はゼロで済んだ。国有化されずにこのまま株を持っていたらマイナスになつていたからな。何億円の借金だけは回避できたんだ。でじこ大臣には感謝しています」

「おまえら、梅田駅のコンコースは平田先生と久弥さんが気に入つていた場所だによ。それをぶち壊して平田先生と久弥さんにどうおわびするんだによ？」

「しかも会社そのものまでつぶしてしまつて、じいさんが黙つてみているとでも思うか！」

その時、阪急三宮駅に落雷が落ち、駅が全壊した。

でじこたちが建物を出たとき、外は激しい大雨が降つていた。邦俊の案内で地下道に入ろうとした時だった。突然雷雲が梅田の空にやつてきて、落雷を阪急本社ビルに落としたのである。たちまちビルは一部が碎け散つて火災が発生した。

「ざまあみるだによ。平田先生の天罰によ！」

その様子はテレビで各地に伝えられた。阪神間ではみな諸手を上げて喜んだと言う。

大山崎駅で王様に献上する酒の受け取り手続きに来ていたびよこと杉本侍従長は帰りに「阪急そば」を食べていてこの有様を見た。

「この阪急そばの天ぷらそばとかやくご飯のセットは生前の久弥が好んで食べていたものでな」

「さすがにおいしいぴよ」

「値段と場所のわりにはいい味だな」

「久弥さんが好むわけです」

そこへテレビで阪急本社炎上のニュースが流れると杉本侍従長はすぐでじこに電話をかけた。

「でじこちゃん、まさか・・・」

「ちがうによ、雷が落ちたによ」

「そうか、ならいいが・・・」

電話を切った後、邦俊は急いで上本町へ戻った。大山崎で杉本さんたちがそばならこつちは上本町のうどんにしようと言ったのである。その後、邦俊はでじこから承認を取り付けてその足で大阪地裁に阪急電鉄の破産申し立てを行った。これにより阪急電鉄は破産手続きに移行することになる。それと前後して日本政策投資銀行から22億円を引き出して東宝に融資し、そのうちの1億5千万円を資本金として東宝の全額出資子会社「関西急行電鉄」を設立し、阪急電鉄の受け皿会社とした。これにより阪急電車の運行はつつがなく行われた。「関西急行電鉄」の社長には東宝の松岡副社長を当方の社長に昇格させた上で兼務させた。

48、人間の鎖

阪急電鉄を処理して一息ついたでじこが次に考えたことはとてつもないことだった。

「邦俊さん、久弥さんの陽明学の世の中を作るにはみんなが団結することが重要だによ」

「そうだね」

「たとえばでじこがここで左手にぶちこ、右手にうさだと手をつなぐによ。そしてぶちことうさだはまた別の人と手をつなぐによ。その人はまた別の人と手をつなぐによ。大勢の人で一齐に手をつなぐと1本の線ができるによ」

「愛知万博のフィナーレのように全員で手をつなぐわけか」

「多くの人間が作るその線を六甲山から有楽町まで作ることはできないかによ？」

みんなは驚いたが、邦俊だけは計算を始めた。その結果130万人がこの計画に参加すれば人間の鎖が六甲山から有楽町までつながるという結果が出た。

「ちょっと邦俊さん本気でやる気ですか？」

「本気だ、でじこちゃんも考えることは同じだな……。」

「まさか、でじこと同じことを考えた人がいるとか？」

「ああ」

バルト三国が独立運動の頂点に達した時、3つの国の首都を人間の鎖でつないで独立の意志を世界に示そうと言う運動が行われた。この人間の鎖は大評判を呼び、バルト3国の独立に貢献した他、ソ連崩壊までをも引き起こす原動力になったのだ。

「問題はどうかやって130万人もの参加者を募ることだが……。」
しばらくして邦俊の携帯電話が鳴り始めた。

電話を受けて邦俊が上本町駅に来てみると、すでに大勢の市民で埋め尽くされていた。傍らではでじこが机を出して早くも市民たちからのエントリーを受け付けていたのである。

「でじこちゃん……。」

「さつき駅の南にあるラジオのスタジオで参加呼びかけをしたらこんなに集まったによ」

「しかし、目標は130万人だぞ、そんなに集まるか？」

「心配ないによ」

でじこはラジオ演説に先立って京都にいる王様にこの計画を話して協力をお願いしたのである。王様もでじこの考えに賛成で杉本侍従長を通じてでじこに対して実行を強く促された。そのためあつという間に参加者が集まったのである。

美香の三宮治所、みけの鳥羽治所、ぶちこの名古屋治所、ぴよこの京都御池治所などには多くの人が殺到した。有楽町では真紅たちが

エントリーの受付に当たった。

京都では杉本侍従長やびよこのほかなんと王様自らも市民からのエントリーを受け付けたのである。宝塚歌劇団や東宝の社員まで受付に回った。上本町では夜10時を過ぎてもエントリーを求める声でこった返していた。結局この日のエントリー受付は合計で80万人を越えた。次の日も上本町ではエントリーを求める人で一杯になった。邦俊はインターネットでの受付も始めたがこれがパンクしてしまっただった。こうした騒ぎは1週間後にやっと収まった。

「やっと落ち着いたか・・・」

結局1週間でエントリーした市民の数は320万人になった。その数に邦俊は驚いてしまった。

「これだけいれば六甲山どころか門司までつなげてもまだおつりがくるぞ」

「なんですとによ？」

「この際日本列島をつなげるところはみんなつないでしまおう」

「賛成によ！」

2月11日、いよいよその時が来た。

邦俊は追加募集の結果、参加人数を530万人にまで増やし、鹿児島から青森の竜飛岬まで人間の鎖をつなぐことになった。関門海峡は国道トンネルを開放して行われた。

午後1時、一斉にみんなが手をつなぎ、総延長3000キロの人間の鎖が出現した。

鎖がつながったのはわずか3分間だけだが、みんなに笑顔が満ちていた。

49、えびすの笹

「邦俊さん、いよいよ陽明学の世の中を作るによ！」

「ちよつと早い気もしますがね。来月美香さんが帰ってきてからでも遅くはない」

そう邦俊におしとどめられてはでじこも引き下がらざるを得なかつ

た。

「平田一族は頭がいいけど、おっとりのんびりしすぎてるによ！」
「あら？それはどうかしら？」

「どいつもこいつもおとなしすぎるによ！美香さんみたいに世の中丸ごと変えようという奴はいないのによ！」

その時、ぶちこがでじこの背中をつついた。振り向くとでじこは絶句した。

「は〜い」

「ジエミニ・・・じゃなくて美香さんによ！」

「早めに戻ってきちゃった」

美香は舞台衣装のまま上本町のでじこの治所に現れたのだ。

「美香さん、邦俊さんはまだ動かないによ」

「そろそろ動く頃だと思っていたのよね」

「なんかいい方法ないのによ？」

美香は久弥が書き残した「道の行く末」と言う本を取り出した。この本は久弥が死去に際して南十字星の旗と共にでじこに託した本である。その際、久弥はでじこにこの本の中に書いてある72章の出来事が久弥の死後50年以内に全て成就すると言い残してこの世を去った。だが実際に成就したのはでじこが久弥と対立した政治家、原口恒雄を倒した部分など7つに過ぎなかった。

3月10日、でじこはぶちこと一緒に笹を持って上本町のホームにやってきた。

これには邦俊も驚いたが、でじこを黙って見送ることにした。

邦俊はでじこの持つ笹についている短冊の一つに「知行合一」「万邦協和」の文字を揮毫した。これは祖父・平田道明が座右の銘としていた言葉だった。

でじこが西大阪線をつたって西宮へ向かったと言っ知らせはたちまち広がり、阪神西宮駅前には大勢の人が詰め掛けた。

あまりの人手に困ったでじこは、本に書いてあった「商売繁盛なら笹もってこい」の言葉を繰り返しながら西宮神社へ向かった。

すると人々も一斉に「商売繁盛なら笹もってこい」と唱和し、でじこの参拝に同行した。

でじこは参拝を済ますと、人々に取り囲まれた。

「おおつ、あれは平田先生の南十字星の旗や!」

「万邦協和・・・平田先生の旗印やさかい!

ここに至ってはでじこもはや人々をとめることはできなかった。

「もうここまで来たらやるしかないによ!みんな!でじこと一緒に平田先生の陽明学の世の中を作るによ!」

こうしてでじここと民衆の力が結束した。

でじこが参拝を終えると、一人の老人が語りかけた。

「ありがたい、平田先生の唱えた「淡路国際自由港」を作ってくれ
るのはでじこはん、あんたしかおらんで」

「なんだによ?」

「かなり昔に平田先生が関西再生の切り札として唱えた計画です」

「淡路国際自由港」構想。それは平田先生が阪神大震災で壊滅した神戸を救うために唱えた「兵庫県再生計画」である。その内容は淡路島全域を経済特区とし、どの国の船舶でも自由に淡路島に寄港できる。淡路島に寄港する船には一切の制限を設けない。それどころか輸入も輸出も為替取引も淡路島内では全て完全自由化。関税、消費税も全て撤廃。工業に対する制限も可能な限り撤廃して物流、生産、金融を完全に自由化し産業の発展を促進するというものだった。言ってみれば淡路島全体を免税店にする構想である。平田道明はシンガポールの繁栄を見てこの構想に関西の再建をかけたのだ。しかし市民には支持が広がったが、行政側は神戸空港の建設に目を向けてしまい市民の不満がたまってきたまま終わっていた。

「でじこはん、あんた、平田先生の夢をかなえてくれんか。平田先生の言うとおりにすれば神戸は再び美しい町になるんやさかい・・・」

このありさまはテレビで関西各地に中継された。京都の宮殿にいた

王様はそれを見て

「だれかある！夢浮橋（杉本侍従長）と花散里（ひよし）を呼べ！」

別の部屋で投扇興に興じていた二人はいきなり呼び出された。

「お呼びでございますか？」

「おお、テレビを見よ」

「でじこおねえちゃんぴよ」

「うむ、遷標（せんぽう）が西宮で騒動を起こした」

「ぴよ？」

「で、陛下はいかがお考えで？」

「この騒ぎ、どうなると見る？」

「でじこおねえちゃんが勝つに決まってるぴよ！」

「そうか」

「ぴよこは平田先生の陽明学が正しいと信じてるぴよ」

「しかしながら騒ぎが長引けば国民が苦しむことになります」

「それは私の意とするところではない。夢浮橋（杉本侍従長）、花散里（ひよし）。私は遷標（せんぽう）に新しい世の中を作らせようと思うが、賛成するか？」

「御心のままに」

「王様についていきますぴよ」

まもなく王様はでじこを助けて新しい世の中を作る詔を発した。

これに京都市民は同調し、今出川から七条までが市民の列で埋め尽くされた。これが知れ渡れば後は早かった。下関では守道が、三重ではみけが、神戸では美香が、長野では信子が、そしてミルフィーユ秘書までが釧路で人々に呼びかけた。

「でじこちゃん、やってくれたな・・・。」

テレビを見ていた邦俊はそう言うのと和服に着替えて上本町駅にでた。すると、今度は号外が配られて王様が京都で立ち上がったことを知った。

「もはや誰にもこの流れは止められん」

「やりますか？邦俊はん」

「野郎ども！うちらもやつたるで！」

でじこは手に笹を持ちながら平田一族ゆかりの神社仏閣を歩き回った。

今宮戎神社、生国魂神社などではでじこが持つ笹に各地の神社のお札が取り付けられた。

50、亡国の総理大臣

そのころ、世の中が落ち着いたと見るや、麻生総理は上海から東京へ戻ってきていた。例によって電話による日米首脳会談である。相手は対日強硬派として知られる民主党のアメリカ大統領、ステファーン・ネーダーだった。ネーダーはこのままでじこの騒ぎが拡大すればアメリカにとってよくないと考えていたので麻生総理に騒ぎの鎮圧を求めた。数日後、アメリカ大使館は麻生総理に「年次改革要求」をつきつけた。なんとそれにはでじこの大臣罷免までが要求されていたのである。

「しかし、現職大臣の罷免まで要求とは、これは明らかかな内政干渉です」

「それでは日米安保体制が崩壊してもいいとおっしゃるのです？」

「やっていいことと悪いことがあります」

「太平洋戦争で負けたのはいったい誰ですか？」

「わかっていますか、だからと言って大臣を罷免しろと言うのには同意できません」

「総理が決断すればすむことじゃないですか。さつさとやりなさい」「貴方は誰に向かって物を言っているんだ？」

麻生大臣は駐日アメリカ大使に食い下がったのには訳がある。日本を守るには日米安保体制を堅持する他ないのだが、だからといってでじこを罷免したら外圧に屈したと言うことで首相である自分の評価が下がる、ましてやでじこ大臣は国民の人気が高く下手に罷免でもしようものならたちまち国民の反発を受けて内閣は崩壊してしまう。

考えた末に麻生総理が出した結論は「内閣総辞職」だった。

一方、でじこたちは名古屋で王様と合流したが、でじこは民衆に少しでも近づきたいという王様とは別に先へと進んでいった。なんにでも鷹揚としている王様の性格にはでじこはついていけなかったからである。だが、UFOの調子が悪かった。

そのためでじこたちはUFOが直るまで王様たちと行動を共にすることになり、ゆっくりと東へ進むことになった。せかすでじこを見て、邦俊がゆっくりと立ち上がった。

「もはやあの場所へ行くしかないだろう」

「あの場所とは？」

「生前、叔父上が神様と会える場所として4つの場所を指定しておいた場所がある。」

「一つは阪急三宮駅前、二つ目は上本町駅、三つ目は有楽町の大黒像」

「そして最後の四つ目は？」

「名古屋駅の北側にレンガ造りのひとときわ古くて立派な建物がある」

「それは……。まさか……。」

名古屋駅の北隣に位置する栄生駅、そのホームから見えるレンガ造りの建物といえば「トヨタ産業技術記念館」であった。生前の久弥さんはヒマさえあれば新幹線に乗ってよくここへきたと言う。それは久弥自身が「ここに来れば豊田喜一郎さんが何かを教えてくれる気がするんですよ」と言っていたからだ。早速でじこたちは産業技術記念館へ行き、入り口の隣にある記念室で豊田喜一郎さんと対面した。するとでじこが恐れおののいた……。

「久弥さんにそっくりによ……。」

傍らにはこんなことが書いてあった。

「ただ自動車を作るのではない。日本人の知恵と情熱で国産自動車を作らねばならない」

「久弥さんの考えと同じだよ」

久弥も生前にでじこにこう話していた。

「コンピュータも飛行機もみなアメリカ製かさもなくばヨーロッパ製だ、これではいかん。日本で使うものは原料だけはいくらでも輸入すればいいが、外国で作った製品を輸入して日本で使うことだけは絶対にいかん！日本で使う製品は日本で作るのだ！」

でじこはアテナントや学芸員たちから豊田喜一郎の生い立ちを聞かされた。

「まるで久弥さんそっくりによ！」

偉大な父を持ちながら親より頭が良すぎた故に親とは同じ仕事をせず、生前に栄光を手にするこなく突然の病気で世を去る。そして抱いた夢が実現したのは彼が世を去ってしばらくしてからだった。

この豊田喜一郎の生涯はそのまま久弥の生涯と重なっていた。でじこは産業技術記念館の倉庫に案内された。そこには10機の小型飛行機と1台の黒塗りの車が置かれていた。

「この倉庫は生前平田先生から製造を託されて先生亡き後は久弥さんが管理なさっておられました」

豊田喜一郎は国産自動車の開発の傍ら、ヘリコプターや飛行機、マシンも国産化しようと開発を続けていた。マシンは後に実用化した。飛行機がトヨタから飛び立つことはなかった。しかし研究は産業技術記念館において続けられた。おりしも不安定な時代、道明はトヨタ飛行機の開発を急がせたが完成前に死去、夢は久弥へと引き継がれた。

研究員たちは当初この倉庫を「平田倉庫」と呼んでいたが、久弥が平田の名前を使うことに猛反対し、久弥が倉庫の正面に豊田喜一郎の写真掲げて倉庫の名を「喜一郎倉庫」とした。だがこれが密かな開発の目くらましに役に立った。平田家が開発を急がせていると、例えば警戒されるが、豊田喜一郎の開発がそのまま継続しているといえはちよつとした美談になったからである。おかげで倉庫は休日には開放されて見学者の見学コースになったのである。だれもトヨタが極秘で飛行機を開発を進めているなど考えもしなかった。飛行機を見たところで模型か何かだとみんな信じて疑わずとも本気で

飛行機を飛ばす時まで誰も考えなかった。だがトヨタは本気で飛行機を飛ばそうと考えていたのである。その結果10機の飛行機が完成したさらにでじこに与えられた車は「トヨタAA セントラル」だった。これは久弥さんの改造車だそうだが、どんな改造を施してあるかは研究員たちも分からないという。だが、でじこはこの車に乗ることにした。しかし元が古い車のためそんなにスピードは出ず、結局はでじこは王様と行動を共にすることとなった。行く先々ででじこは王様と共に歓待された。愛知県内ではどこでも平田先生と久弥さんは半ば神格化された存在だったのである。1週間後になつて、でじこたちは蒲郡市までやってきた。ここは生前の久弥さんが持っていたヨットの係留基地としていたところであり、久弥さんのヨットもそのまま残っていた。王様はでじこたちと共にみかん畑を視察した。蒲郡のみかんはその甘みで知られた味だったのである。かつて平田先生がこの地でみかんをすすめられて食べたところこれが大変おいしいと喜んだため、平田家が毎年蒲郡のみかんを買い上げていたいきさつがある。後に平田先生や久弥さんがこの国の繁栄を願う数百本のみかんの苗を蒲郡に植えた。今ではどの木も多くの実をつけ「平田みかん」として出荷されているのである。でじこたちはみかんの皮を捨ててしまつたが、この皮に注目している人物がいた。邦俊である。彼はみかんの皮を絞った。すると一種の揮発油ができた。邦俊はそれをでじこのUFOの機械部分に差したり、汚れている部分を磨いたりした。するとUFOの機械部分が立ち直り修復できた。このためでじこはぶちことゲマを連れてUFOに乗って先を急ぐこととなった。

でじこことぶちこのUFOは運転を誤り、墜落してしまった。直せる人間といえは邦俊さんくらいのものだが、肝心の邦俊さんは王様にくつついていて来るまでに時間がかかる。

おまけにここがどこか分からなければ助けも呼べない。でじこたちは途方にくれた。

日差しが強くなったのででじこことぶちこは日傘をさしていたが、そ

れをみた神職がでじこの元へとやってきた。

「どうやらここは神社ゲマね」

神職は驚いて声を出した。

「おお」

「なんだによ？」

「あなた方はメアリーポピンスでは？」

神職は感激して言った

「先の東京都知事、平田久弥さんがこの町に来た時言いました。『

私の後に傘を持った女の子がこの町に降りてきて町の人を救う』と」

「久弥さんが？」

「私どもは久弥さんが語る物語『メアリーポピンス』だとばかり思
つていました」

ぶちこが控えめに南十字星の旗を掲げて告げた。

「控えい、このお方こそ平田久弥が後継者と定めるシヨコラ・デジ
キャラットであるぞ」

神職たちはたちまち恐れおののき、でじこたちを本殿へ案内した。

「この三島大社は商売の神様として知られるえびす様と共に三島大
社にゆかりの深い平田道明・久弥親子も神様としてお祭りしており
ます」

「ところで、あなたが久弥様の後継者とは・・・」

「でじこは東京へ向かうところだよ」

そう言うのでじこは「えびすの笹」を差し出した。

「おう、これは西宮神社や熱田神宮などのお札だな」

「いずれも平田親子にゆかりの深い神社ばかりじゃ」

神職はそう言うのと三島大社のお札をでじこの持つ笹の一番高いところ
につけた。これででじこの笹につけられたお札の数は12個とな
った。

でじこが空腹を訴えると、神職はすぐにうな井を出した。

「この三島はうなぎの名所として知られております。久弥さんはう

なぎなら浜松よりも三島に限ると評したほどの味でございます」
しかし、ぷちこだけは満足な顔を見せなかった。すると、神職はぷちこに鮎の塩焼きを与えた。これはぷちこの気に入ったらしくぷちこは3匹をあつという間に平らげたのである。

51、やってきた真紅

次の日の朝、ぷちこは不思議な光景を目にした。

「かばんが空を飛んでるにゅ」

「ぷちこ、かばんが空を飛ぶわけが・・・」

「でじこ、あれは！」

そう、真紅たちローゼンメイデンシリーズの人形たちだった。

「女王様がやってきたによ」

真紅たちは岩槻に赴任した時、真紅と蒼星石以外の人形たちはこんな田舎町にと口々に文句を言っていた。雛苺に至っては真紅に役目を王様に返上してもつといいところと取り替えてもらえとさえ言った。蒼星石は久弥さんの遺言に基づいて王様が任命したのだから必ず何かあると言ってみんなをたしなめた。真紅にとってはいいお茶さえ手に入れば任地はどこでもよかった。狭山茶などいいお茶が手に入りやすかったからだ。雛苺には秩父や栃木で苺を手に入れて与えたので彼女はおとなしくなった。ところが真紅たちは後に驚くべき計画を知る。久弥さんが岩槻にトラックターミナルを作り、真紅たちに物流管理をさせる計画だった。岩槻は東北自動車道が走り、東北地方からの貨物がたくさん通っていた。そこで久弥はここに一台物流拠点を作って物資の円滑な流通に役立てようと考えたのだ。さらに岩槻から大宮まで道路を作り鉄道とトラックを連携させることにした。これが大いにあたり、岩槻の町はにぎやかになったのだ。さらに岩槻の誇るべき伝統産業が「人形」であったことも久弥が真紅たちの任地をここに定めた理由だった。でじこが西宮に来た時、真紅たちは岩槻でテレビを見ていた。その日から数日間にあつて真紅は町田市の久弥の住居跡、現在はミルフィーク秘書が運営する

「平田図書館」で資料を調べまくった。何か作戦を久弥が残してないか探したのである。探し物は簡単に見つかり、真紅は本の貸し出し手続きをお願いした。久弥の指令はでじこたちと三島大社で合流せよとのことだった。だが、でじこたちが久弥の予想より短気だったのか早く進んでしまい、真紅たちが駆けつけたときにはすでにじこは三島大社の境内にいたのである。

何度か久弥が真紅を伴って三島大社に参拝していたため、三島大社の神職たちも真紅のことは知っていた。その時だった。いきなり空から別の人形が現れて真紅たちを襲った。ピンクの服を着た人形は真紅たちに襲い掛かったが、でじこがすかさず「目からビーム」を出したため人形はすばやくその場から立ち去った。

52、三尺三寸箸の宴

その夜、三島大社に一団が現れた。邦俊率いる先発隊である。

邦俊は静岡に王様を残し、自分は道を広げると言って先発隊で先へと急ぎ、三島大社にやってきたのだ。昼間のいきさつを聞いた邦俊は驚いた。

「薔薇水晶ね」

「なんだ？それは？」

「ローゼンメイデン第7ドール」

「つまり、君たちの妹か？」

「邦俊さん、水晶をぶっ壊す方法はないのによ？」

「ふむ、アセチレンバーナーでも使ってみるか」

邦俊はアセチレンバーナーで薔薇水晶を溶かそうと考えた、が・・・

そこへふすまを開けて一人の老人が入ってきた。

「お待ちなさい！」

「昼間のおじいさんによ」

昼間でじこの相手をした老いた神職、それが三島大社宮司・町田安則だった。

「昼間の様子を見ていたが、相手はなかなか賢そうな子だった。バーナーなど使ったら返り討ちになってしまっぞ。ここは一つこの年寄りにお任せなされ」

「町田宮司、何を？」

「三尺三寸箸の宴をやるのだ」

次の日、町田宮司は立派な食事をみんなに用意した。しかしあることに気付いた。

「邦俊さん、箸がないによ？」

「本当だ、これじゃ食べられないな」

「箸ならあるぞ」

見ると、それぞれの席の前にはたしかに箸に見える木でできた長い棒が2本置かれていた。棒の長さは1mもあるうか。

「町田宮司、この長い棒は確かに箸の様に見えますが、これが箸と言うならどうやって料理をとって食べるのですか？」

しかし町田宮司は何も答えなかった。

さすがに長さ1mの箸では料理を取って食べることはできない。全員が途方にくれてしまった。しばらくしてぶちこがつぶやいた。

「でじこ、口あけるにゆ」

でじこは言われるままに口を開けた、するとぶちこは自分の持つ1mの箸ででじこの口の中に料理を運んだ。

「おいしいによ〜。ぶちこ、お返しにこれ食べるによ」

でじこもぶちこの口に1mの箸で料理を運んだ。これにみんな気付いた。自分で料理を取るのではなく相手に料理を取ってあげる。するとみんなが楽しく宴を始めた。

宴が盛り上がってきたところで町田宮司がカラオケセットを出した。するとたちまちマイクの奪い合いになった。

「人形のくせしてなまいきによ！」

「歌うのは私ですわ」

「ひなが歌う〜」

しかしぶちこだけは争いに参加せず落ち着いてマイクを拾って邦俊

に渡した。

邦俊はマイクを拾うと歌いだした。

「水にきらめく、かがり火はぐだれに想いを、燃やすやら」
五木ひろしの「長良川艶歌」であった。

そのうち、薔薇水晶が木の陰からその様をのぞくようになった。
みんなが緊張したが、邦俊さんだけは気付かないふりをしていた。
邦俊さんは盛り上がっているふりをして「三尺三寸箸」で薔薇水晶の口元に料理を運んだ。すると薔薇水晶は料理を口にして「おいしい」とつぶやいた。

ほどなく薔薇水晶は宴に加わった。

「薔薇水晶とやら、相手を倒すだけが生きていく方法ではない。相手とともに栄える「共存共栄」という生き方もあるのだ」
邦俊がそう語ると薔薇水晶は小さくうなづいた。

53、リリ大使、日本に来る

そのころ、ニューヨークの国連本部では一人の男が演説を始めていた。国連の日本大使が米政府からもたらされた年次改革要望書を手演説をしていたのである。

「国内の制度改革にとどまらず、一国の大臣の罷免要求をするのはこれは明らかな内政干渉であり、国連憲章に合致するものではありません！これは国際法に対する侮辱であります！」

国連大使の名は一条広隆、宝塚花組トップスター一条きららの弟で平田道明の弟子である。かつてでじこが原田恒雄を倒した時、原田の首を取ったのがこの男である。その昔、小学校教師だったと言う博識をでじこに買われてでじこの推薦で麻生首相から国連大使に任命されたのである。

広隆の演説が終わると、フランス大使が話しかけてきた。フランス大使の名は、ジャック・リリといった。広隆とは初対面だった。リリ国連大使は広隆の前に来ると一冊の本を広隆に見せた。

「ムシュー・イチジョウ、この本の著者をご存知ですか？」

本を見せられた広隆は驚きの色を隠せなかった。それは「The History of Japan written by Michiaki Hirata」と書かれた本だった。平田先生が生前外国人に日本の歴史を説くためにわざわざ英語だけで書いた本である。

「はい、知っていますが・・・」

「私は今月で国連大使から日本に赴任する大使になりますが、この本の著者にぜひ会いたいと思っています」

「それは無理でしょう。著者はすでに亡くなっている」

リリ大使はこの本を読み日本に興味を抱き日本大使にして欲しいという願いがやつと聞き届けられて楽しみにしていたと言う。

「でも生前の著者が自分の跡継ぎと決めた人物が日本にいます」

「それは？」

「私が今日の安保理の演説で話したアメリカ政府が日本政府に罷免を要求している「でじこ大臣」こそ、その本の著者が自らの後継者と定めた人物です」

「政治家なのですか？歴史学者ではないのですか？」

「彼は彼女を政治家として育てて日本を立て直すつもりだったようです」

「そのでじこ大臣の人となりは？」

「会ってみれば分かります」

一週間後、でじこたちは沼津から船に乗って銚子に来ていた。神奈川県はすでに陸上も海上も米軍がでじこを待ち伏せしていたのである。しかし中日新聞など多くの新聞が「10歳の女の子ひとりに何万の軍隊と1億ドル以上の経費を使うとは」と笑いものにしていた。カナダの新聞すらこれにはあきれたと記事を書いたのである。そのためでじこたちはみけの船を使って千葉県へ直接渡り、自分たちが予定していた陸路には王様を通らせることにした。いくら米軍でも王様相手に発砲するはずがなかった。

でじこたちは銚子から西へ進み、翌日には成田に達し、成田山新勝

寺に入った。成田山は規模は大きくないが、ここも平田先生にゆかりの深い寺である。そこででじこたちは本を片手にいろいろ寺を散策している外人に出会った。

「おじさん、なにしてるによ？」

その男は振り返ってでじこを見たとき、驚きの声を上げた。

「貴方がでじこ大臣ですか・・・」

「あなたさん、誰によ？」

「この度日本に赴任したフランス大使、ジャック・リリと申します」「フランス大使がなぜでじこさんを知っているのですか？」

リリ大使は一枚の手紙を差し出した。

「なんだ、華麗田さんの女性版（一条きらら）の弟さんのお友達かによ」

さらにリリ大使は一冊の本を差し出した。

「これは・・・」

「英語で書いてあつて読めないによ」

「まさか・・・」

邦俊は驚いて本を見ると、「平田道明」の名がある。

「これは生前じいさんが英語で書いた日本歴史の本だ」

「では、あなたがこの本の著者の子孫ですか？」

「確かに私はこの本の著者・平田道明の孫、邦俊だ。しかし、じいさんの後継者は私ではない」

「一条大使もそういつてました。この本と歴史を継ぐのは「でじこ大臣」だと」

「私はじいさんの遺言に従い、でじこ大臣を内閣総理大臣にして日本を救わなければならないのです。リリ大使も東京へお越しください」

「はい」

一方神奈川県内は大騒ぎとなった。でじこ大臣を殺そうと陣取った米軍がいざでじこ大臣がやってきたと勘違いして一斉射撃を始めた。これがなんと王様の行列だったからである。おどろいた在日米軍

司令官が血相を変えて王様に詫びを入れようとしたが、温厚な王様もこの仕打ちには激怒していた。

「お前たちはそんなにこの国の王様が憎いのかびよ？」

「王様に対して狙撃するとは、もはや日本を攻撃したも同じだ。それとも米軍は日本をつぶしてもかまわないと言われるのか？日本国民を皆殺しにしても許されるのか？」

「それは何かの間違いです」

「王様は大変ご立腹なされている」

「この度の事件の責任者は厳しく責任を追及した上で日本政府に引き渡しまして・・・」

だが、そんなことは容易ではなかった。実行者にとっては上司の命令を実行しただけなのに罰せられるとなったら軍隊の規律そのものが乱れる。だからこの場合は判断ミスをした上司がまず罰せられるべきなのだ。つまり責任を問うとなればまず在日米軍司令官から責任を問われるのである。先代の王様ですら日本の国のために政治家や国民が犯した罪の責任を一身にかぶる決心を固めたこともあるのだ。もちろん今の王様もその決意にかわりはない。王様にはそんな司令官の態度や言動がいかにも自らの責任逃れにしか見ることができなかった。

一方、でじこたちは成田山でお札の代わりに「木札」をもらった。

これは笹にはつけずに各自で身につけるお守りだった。でじこたちはリリ大使の車に乗ることにした。リリ大使は元F1レーサーでもあったので車の取り扱いに慣れていた。リリ大使はとりあえず箱崎まで行き、そこから有楽町駅前の少し手前でまずは真紅たちを下ろした。

真紅たちは有楽町の駅前にいき、早速「人形楽団」の演奏を再開した。有楽町に人形楽団が戻ると人々は色めきたった。真紅たちが「おおシャンゼリゼ」の演奏を始めると、リリ大使はおもむろに真紅たちの演奏場所にゆっくりと車を近づけ、車を降りると自分も一緒に歌いだした。後からでじこたちも降りるとひととき歓声

が上がった。

54、でじこ内閣成立！

その日、王様も東京の宮殿に入った。

「陛下、いよいよ新しい国を作る人物を宮殿内に迎え入れねばなりませんな」

「わかつておる・・・」

王様も杉本侍従長もいよいよでじこを総理大臣にしなければと思っていた。

それはぴよこにも分かったが、自分が王様の使いとして行けばでじこにバカにされて帰ってくるのは分かっている。杉本侍従長にしても自分がいつてもだめだろうと考えた。でじこが一発で言う事を聞くような人物を王様の使いにしなくては。

3月29日、アキハバラへ帰ったでじこの元へやってきたのは・・・。

「でじこちゃん」

「美香さん」

美香は王様の使いとしてでじこの元へとやってきた。

「でじこちゃん、明日王様がでじこちゃんを総理で偉人に任命するから宮殿に来なさいと」

「明日？」

次の日、美香は無理やりでじこことぶちこを連れて宮殿に連れて行った。

「なんだによ、突然に」

「でじこちゃん、王様は今日からでじこちゃんを総理大臣にするの」

「だったら明日でもいいによ」

「だめ、王様はどうしても今日にこだわっているの」

「なんか意味でもあるのかによ？」

「六甲山の平田神社では年に2回お祭りがあるの。一つは6月5日の平田道明祭、そしてもう一つが3月30日の平田久弥祭」

「今日が久弥さんのお祭りかによ」

「そう、二人の誕生日に合わせてお祭りがあるの」

王様は久弥の誕生日に合わせてでじこを呼び新しい世の中を託すつもりだった。

やがてでじこが王様の前にでると、おもむろに王様が口を開いた。

「シヨコラ・デジキヤラツト、右の者 内閣総理大臣に任命する」
でじこ内閣の誕生である。

この様子はテレビで中継され、特に関西では快哉の声が絶えなかつたと言つ。

さて、でじこは平田先生の考えを次々実行に移していった。

まず自分の経済産業相の後任に邦俊を据えた。邦俊は企業再編に大なたを振るつた。中でも注目すべきは三菱重工と川崎重工の航空機部門をトヨタへ売却させて新たに「トヨタ飛行機」を作つたことだった。これには世界中に激震が走つた。一方、これに危機感を抱いている男がいた。アメリカ大統領、ステファン・ネーダーである。4月に入って、ネーダー大統領はついにテレビ演説を行った。日本に対して無条件査察を行う国連決議案を提出した上、「でじこ首相とその関係者は48時間以内に日本を離れなければならない」と演説した。この要求を日本政府がのまなければ日本攻撃もあると言つ。ほとんど暴力団の手口である。

「なんとという勝手な男もいたもんだによ……」

「でじこに言われたらおしまいにゆ」

「どうするゲマ！」

「とりあえず邦俊さんの所へ行くによ！」

しかし、邦俊は留守だった。杉本侍従長を通じて王様から食事会に呼ばれていたのである。食事会がデザートに差し掛かる頃、でじこたちは宮殿の大広間に到着した。

「邦俊さん！大変によ！」

「騒々しい！何事だ！」

王様には珍しく大変大きな声で怒鳴られた。

「お、王様もいたのかによ？」

「控えい！王様主催の食事会であるぞ！」

「まあよい。来た理由はわかっておる。おおかたアメリカがとんでもないこと言つて困つて相談に来たのであるう」

「さすが王様、何でもお見通しにゆ」

「日本国最高責任者として私が命令を授けよう」

そついうと王様はでじこの元へと寄つてきた。

「溲標、仲間を引き連れてすぐ日本を出よ！」

「な、なんですと？」

その場にいた一同は皆驚いた。

「王様はでじこおねえちゃんに新しい世の中を作らせる気じゃなかつたのかびよ？」

「この国を守るためには、できるだけ多くの国民に生き残つてもらふことが大事だ。流す血は可能な限り少なくするのがいい」

「だからといつてせつかく首相に任命したばかりのでじこ大臣を更迭などなさいましたら、陛下も任命権者としての責任を問われます」

「夢浮橋（杉本侍従長）、誰が溲標を更迭するものか。今の日本を立て直せるのは溲標をおいて他に誰がいるというのだ？」

びよこだけは「自分びよ！」と言いたかつたが、その場の迫力に押されて声がでなかつた。王様はすぐその場で勅令をしたためて杉本侍従長に手渡した。

「夢浮橋（杉本侍従長）、溲標たちを伴つて明朝羽田へ向かえ」

次の日の朝、でじこ首相が首相専用機で羽田を離れたというニュースが坦々と流された。このニュースを聞いたアメリカ政府はイラク戦争のときと違いこつもあつさりでじこ大臣が日本を離れたという知らせにかえつてあきれ果ててしまった高官もいたという。いずれにせよでじこ大臣が国を離れよという要求は通つたため日本攻撃の理由がなくなつてしまつた。

昼過ぎに政府専用機はシンガポールに到着した。邦俊はでじこたちが寝ているのいいことにこっそり全員をシンガポール航空機に乗せ換えた。しかも邦俊はシンガポール・チャンギ国際空港で会見を開き、でじこ首相はシンガポールにいることを強調した。これを受けてアメリカ軍はシンガポール入りを希望したが、シンガポール政府と英国政府が難色を示しさらに隣国のマレーシア政府は強硬に反対したためあきらめざるを得なかった。さらにマレーシア政府はでじこ首相の亡命受け入れを表明したが、邦俊はこれを丁重に辞退した。この混乱に乗じて一行はカナダのバンクーバーに向かった。バンクーバーではトランジットを装って邦俊は作業員に変装して作業を終わらせた。そして向かったのが、シアトル・タコマ国際空港。ここですでじこたちは目覚めた。

「ここはどこだよ？」

「コーヒーのおいがするにゆ」

「ここはシアトル・タコマ国際空港。じいさんが全米で最も先進的できれいな空港と評した所だ。」

そこででじこは懐かしい声を聞いた。

「みなさ〜ん、ご無事ですか〜」

そこにいたのはミルフィーユ秘書だった。

ミルフィーユ秘書はみんなにコーヒー、真紅だけにはミルクティーを持ってきた。

「ここシアトルは25年前におじいさまが全米での活動拠点に定めた町です」

「さすがじいさんだ。先見の明があつたわけだな」

25年前と叫びたら、シアトルの主要産業はボーイングしかなかった時代である。もちろんシアトルの名も日本ではほとんど知られていなかった。しかし、その後のシアトルからはマイクロソフト、スターバックス、マリナーズ、アマゾンドットコムなど後に日本でも大活躍する企業や産業が育っていったのである。全米で最もハイテク産業が進んだ町に道明がその拠点を定めたのは、道明・久弥親子

の軌跡に大きな影響を及ぼしたのである。でじこは邦俊がコーヒーをがぶ飲みするのを見てあきれていた。しかし邦俊にとっては夢にまで見た本場のシアトルコーヒー、飲まずにはいられなかった。

シアトルからはでじこたちはミルフィーユ秘書の妹で空自のパイロット、牧村ちとせの操縦する飛行機に乗ることになった。真紅はパイロットのちとせに尋ねた。

「どこへ行くのです?」

「JFK」

真紅たちは驚きの声を上げた。

「なんでみんな騒ぐのかによ?」

「この飛行機はニューヨーク行きですわ」

この言葉ででじこは完全に目が覚めた。

「王様の命令だ。でじこ総理を特使として国連総会に出席させると」

「なんですとによ?」

「さすがは王様にゆ。ただで相手の言うこと聞かないにゆ」

王様の作戦はでじこたちを国外へ出して紛争を避けるふりをしてその行き先が相手のふところでは大笑いの種だった。飛行機は程なくニューヨークのJFK空港に着陸した。

これにアメリカ政府は驚き仰天したが、自分が言った事に対して間違っではないしましてやこうなつては騒ぎを起こせば自国民に影響を与えるだけ。仕方なくでじこ首相の入国を認めた。空港に着くなり邦俊は報道陣を前に会見を開いた。

「ニューヨークで演説をした後、ホワイトハウスで全てをネーダー大統領とでじこ首相と直接談判。そのスケジュールです」

「危険を冒してまで来た勇気の原因は?」

「一言で言えば「武士道」です。我々は生命も名誉も運命さえ度外視しております」

邦俊は別の貨物便で運ばれた荷物を解いた。それは産業技術記念館からでじこに与えられた久弥さんの車「トヨタAA セントラル」だった。

でじこたちは空港からホテル「ウォルドルフ・アストリア」へ向かった。ここはかつて久弥が働いていたところで、王様の常宿でもあった。

まるで1930年代そのままの行列は各種メディアの格好の取材の的となった。

ホテルに入ったでじこは悩んでいた。明日の国連総会ででじこが日本政府代表として演説することになっているが、でじこはどのように話していいかわからなかった。

それを察した邦俊は一計を案じた。

次の日、国連総会会議場にでじこたちが現れると拍手をもって迎えられた。

中央の議場にでじこが立つと、スポットライトがでじこに当たり、真紅たち「人形楽団」が音楽を奏でた。その音楽に合わせてでじこが平田先生との出会いからの物語を演じた。アキハバラの空襲から始まって上本町の南十字星の物語、久弥の都知事当選とその死、あかりの死と六甲山への埋葬、ラプソドス団の結成などの一連の物語だった。なかでも最後の有楽町に平田先生の南十字星が現れるシーンは人々の涙と感動を誘った。国連総会では日本支持の決議が賛成多数で可決された。

こうなるとアメリカの旗色が悪くなった。ネーダー大統領はでじこ首相との会談をしないわけにはいけなくなった。でじこたちはホワイトハウスに向かった、しかしその時だった。突然ホワイトハウスに落雷が起こり、ネーダー大統領はホワイトハウスの門前に来ていたでじこたちの前に投げ出された。

「大統領、しつかり・・・」

「君たちは？」

「日本から来たでじこ首相の一行でございます」

「でじこ首相？それに私はなぜここにいるのだ？」

「まさか、ネーダー大統領は記憶喪失にでもなってしまったのか？」

邦俊たちが手分けしてネーダー大統領を病院まで運んだ。

ネーダー大統領が記憶を取り戻したのは1時間もたつてからのことだった。

病室にでじこたちが呼ばれて驚くべき事を聞かされた。

「君たち、よく聞くがいい。私が上院議員だった頃だった。ある夜に黒い羽の女の子が現れて私に権力を物にしませんかといってきた。私は断ったが、するとそのこは私に指輪をはめたのだ。それから私は君たちの前に倒れるまでのことは何も覚えていない」と
すると真紅は1枚の絵を差し出した。

「大統領、その女の子とはもしかしてこの子では？」

「お前の知り合いかによ？」

「ええ、ローゼンメイデン第1ドール・水銀燈ですわ」

「いつたい君たちの姉妹は何人いるのだ？」

「全部で7人」

現在でじこに付き従っているのは真紅、雛苺、翠星石、蒼星石、金糸雀、薔薇水晶の6人だった。

「と、いうことは、君たちの最後の姉妹か」

「水銀燈は姉妹の仲でも特別に邪悪な性格、みなさん、すぐに有楽町へ戻りましょう！」

56、有楽町の乙女たち

「いつたいその水銀燈とやらの狙いは何なのだ？」

「この地球から平和を奪い取ることに、そして私たちの「ローザミステイカ」を奪うことですわ」

「それはいつたいどういうものなのだ？」

「私たちの命、とでも申し上げておきましょう。それを奪われると私たちはただの人形になってしまいます」

「それはいかな」

「私たちは「アリス・ゲーム」と言って他の姉妹の「ローザミステ

イカ」を奪うことを宿命付けられていました。しかし……。私はマスターに会って考えが変わりました。他の姉妹から命を奪うことではなく仲良く暮らしていくことが大切なのだと……」

「そりゃそうだ。じいさんだったらそんな姉妹ケンカ許すはずがない」

「私はその考えの尊さを他の姉妹たちに説きました。今では薔薇水晶もマスターの考えに賛同してこうして私たちについてきてくれます。しかし最後までその考えに賛同しなかったのが水銀燈でした」

「そんなやつは平田先生の天罰で滅びるがいいによ！」

「水銀燈のことですから何をしでかすか分かりません、急ぎましよう！」

こうしてでじこたちはすぐさま羽田に戻った。しかしそこは暗くなっていた。いやな予感がしたでじこたちはすぐに宮殿に向かうことにした。でじこたちが到着すると宮殿はもぬけの空になっていた。王様は宮殿入り口に近い宮殿病院へ向かったと言う。

「王様！大丈夫かによ？」

「おお、私は無事だが、夢浮橋（杉本侍従長）がやられてしまった」杉本侍従長は肩に傷を負っていた。

「まいりましたね、これじゃ投扇興がしばらくできないな」

「そんなこといつてる場合じゃないぴよ」

杉本侍従長はぴよこに3本の扇を渡した。扇にはそれぞれ「夢」「浮」「橋」と記してあった。いずれも杉本侍従長の得意技「夢浮橋」にちなんだものである。

東京はすでに暗黒の雲に覆われていた。でじこたちは閣議を首相官邸ではなく有楽町の東京宝塚劇場の会議室を借りて行った。閣議といても実質は対水銀燈の作戦会議だった。

「相手は恐ろしい奴によ！そこででじこはこの際全員を有楽町に集合させてみんなで戦うことにしたによ！」

すでにでじこはぶちこ、うさだ、ぴよこ、みけ、りんな、それに美香さんとミルフィーユ秘書とその妹ちとせも有楽町に呼んでいた。

これに真紅たちローゼンメイデンの6人がそろって合計15名の乙女たちがそろったのである。

でじこたちが東京宝塚劇場を出るとすでに上空では水銀燈が町を焼き尽くして真紅たちをおびき出そうとあちこちに火を放っていた。有楽町から発した火は西は日比谷公園、南は汐留、北は丸ビルまで迫っていた。

火は宮殿病院で杉本侍従長の病室にいた王様からも見えた。

「夢浮橋（杉本侍従長）、私は遷標^{てんひょう}たちの身を案じております」

「平田教授が認めた子です。きつと生きて帰ってきますよ」

「そうであつてほしいのですが……。しかしその後はどうなるのです?」

「陛下?今のお言葉は?」

「夢浮橋（杉本侍従長）、分かりますか?遷標^{てんひょう}たちの働きはどのような結果であれ、今後この国の歴史に大きな影響を及ぼしますよ。

平田の名前と歴史学と共に……」

その時、クウが病室にやってきた。

「おっさん、お客さんだぜ」

「こら!相手はかしこくもこの国の国王陛下であらせられるぞ!」
しかし王様はびよこの家来である3人の医者のうちクウを一番気に入っていた。若い頃はほとんどの武芸・スポーツをたしなむ活発な若者だった王様は元気な若者が何より好きだった。そういった元気をたくさん育てることがこの国を発展させる手段と信じていたからである。

王様の元へやってきたのは消防隊長だった。

「陛下、この度の大火、とても通常の体制では収まりません。なにとぞ消火のために宮殿の堀の水の使用を裁可していただきますようお願い申し上げます」

「うむ、裁可する!それから人が可能な限りこの宮殿病院に運び込むがよい。医者たちは力を合わせてできるだけ多くの命を救うのだ。薬が足りなければ私が御用金を出そう」

「陛下、あれは非常用の軍用金ですぞ！」

「夢浮橋（杉本侍従長）、今「軍用金」と言ったな」

「はい」

「お前は人と人が殺しあうことだけが戦とでも思っているのか？この大火こそがこの国を滅亡の瀬戸際に立たせる戦争ではないか。その証拠に人々の殺し合いはないが、軍隊は出動して犠牲者もでているではないか！」

「左様でございましたな・・・」

「ならば国王である私が率先して指揮を取り、国民を救うのは当然のこと。私がやらねば誰がやるのだ？」

「陛下のお心は分かりました。皆の衆！陛下の考えを実行するのが陛下にお仕えしているわれら侍従の使命！直ちに陛下の命に従うのだ！」

こうなつては怪我をしている杉本侍従長もベッドに寝ているわけにはいけなくなつた。

やがてけが人が次々宮殿病院に運ばれてきたが、杉本侍従長は自分の体を添木と包帯で固定してまでもけが人の介護に当たつた。王様も自ら陣頭指揮に立ち、負傷者の介護に当たつていた。

そのころ丸の内中央口では邦俊と守道が消火活動に参加していた。

「急げ！東京駅を消失させてはならんぞ！」

「下関の悲劇を東京には持ち込ませないぜ！」

守道の脳裏にはかつて三角屋根の駅として親しまれた地元の下関駅が心無い放火によつて一瞬で全焼した光景が焼きついていてた。この時父、和夫の墓前で泣いてわびた苦い過去がある。めつたに高い評価を他者に与えるといったことがなかった和夫が唯一驚嘆した東京の景色、それがレンガ造りの東京駅だった。邦俊にとつても祖父道明の思い出が残る場所だった。だが火の勢いは強く、東京駅では辛うじて一進一退の攻防になつているものの、日比谷公園では多くの木が類焼して火の勢いは増していた。

東京駅でも火を食い止めるのが精一杯だった、火の勢いは丸の内口

を素通りし、神田駅前から万世橋にまで迫った。交通博物館は閉鎖され、旧万世橋駅は臨時の救急病院になった。こうなるとゲーマーズも休業し、店長さんは神田川の水をくみ上げて消火活動に当たった。

その時だった。アキハバラに再びオタクたちが戻ってきたのである。見かけは異様でいろんな属性があるが、ここに至ってはそんな属性や壁は何の障害にもならなかった。豊富な知識を生かし、あるものは消火剤を作り、あるものはけが人の治療や看護に当たり、あるものは店の商品を運び出し、あるものは交通整理に当たり、そしてまたあるものは神田川の中に入って自ら水をかぶりながら消火活動に参加した。もはや彼らの目的はただ一つ、自分の持てる才能を使ってアキハバラの町を守ることのみだった。

オタクたちだけではない、アキハバラの店員たちも万世橋警察署の署員も交通博物館の職員も、そして道明・久弥・邦俊の平田家三代にわたって愛された「肉の万世」の店員たちは特に積極的に活動した。平田家の迎賓館として利用されてきた「肉の万世」は4階に「久弥の席」、7階に「美香の間」、そして最上階の10階には「平田道明の間」があるほど平田家にゆかりが深かった。店員たちは「平田道明の間」だけはなんとか残そうと死に物狂いで働いたのである。アキハバラで神様になっていた道明の遺構が消えることはアキハバラの歴史が消えることであった。歴史を否定することは自らの出自を否定すること、すなわち自らの存在意義を否定することと道明は教えていた。

歴史の存在なくして自らの存在もないのである。だからこそアキハバラから歴史を消すことだけは防ぐ責務があった。そのうちだれかが「南十字星の旗」を持ち出した。もちろんこれは模造品である。人々はいつしか南十字星の印を身にまとい、または掲げて「ワルディング・マチルダ」を歌いながら統制を取っていた。そのかいあつてか火は万世橋のガード下で止まり、あふれた火も淡路町や小川町付近で止まって御茶ノ水まで火が回ることは避けられた。だが人々

の動きは止まることはなかった。消火の隊列は神田駅前にも及び、一部は東京駅にまで達した。こうなると火の勢いが弱まってくる。ところが邦俊たちにも分かってきた。

「リリ大使、お一つどうぞ」

「おお、私はおにぎりと柿の種が大好きですね。日本では火事の際に食べるのですか？」

「日本では「炊き出し」と言って火事や災害の際におにぎりなどの食料を提供する風習があります」

「火事の場合は被災者と消火にあたった人々が食べることができません」

「それにしてもよく助かりましたね。これがパリだったら天国行きだ・・・」

「一時はもうだめかと思っただけだね・・・」

「東京駅と運命を共にするなら尾崎先生やじいさんも文句は言わんだろうと覚悟はできていたが・・・。お互い悪運が強すぎますな」

「邦俊、まだそう考えるのは早いんじゃないか？まだ仕事が残っているぞ」

「そうですね、まだ火が消えたわけではないし・・・」

「あほう！おまえのじいさんの最後にして最優秀の弟子を救出しないことにはじいさんが納得せんぞ！」

「そうでしたな・・・」

しかし中央郵便局の裏手から先は火が回っていて容易に先へと進むことはできなかった。

「うっかり有楽町へ近寄れないな・・・」

普段なら歩いても15分でいける距離だが、火の勢いは強かった。

その時だった、いきなり大きな爆発音が響き、爆風が邦俊たちを襲った。

「こんな人の集まるところに爆弾なんかないだろうね？」

「不発弾でも埋まっていたのか？」

その時伝令が走ってきた。

「申し上げます！ただいま中央郵便局の南側にあります三菱東京UFJ銀行本店の地下石油倉庫が爆発しました！」

「なんで銀行にそんな危険物があるんだ？」

リリ大使は驚いたが、邦俊や守道は納得していた。

「三菱ならね・・・」

「三菱だったらありえる・・・」

「なぜ皆さん納得しているのですか？」

「それは三菱だからですよ」

「ミツビシ？何ですかそれは？」

邦俊は紙に三菱のマークを書いてリリ大使に見せた。

「ザ・スリーダイヤモンドズ」

「オー！スリーダイヤモンドズ！分かりました」

「もともとこの辺りは「三菱村」と言われ、三菱の土地でした」

「スリーダイヤモンドズ！日本で一番の技術を持つ企業グループです
すね」

「石油にも強い、だから不思議はないのさ」

「それより、有楽町はまだ火が消えていない！急ぎましょう！」

邦俊は丸ビルの南側から有楽町を目指した。

リリ大使はふところから1冊の本を取り出した。

「The Tale of Genji Arthur Waley
ey・・・」

「守道さん、これは「ウェイリー訳源氏物語」ですよ」

「何？これが源氏物語か？」

「はい、アーサー・ウェイリーによる英訳源氏物語は大変親しまれています」

「私もフランスの外交官たちは日本に赴任するに際して大統領から必ず読むようにとされる物語です。もっとも私はそれ以前から愛読していましたが」

「そういえばフランスの大統領は大変な日本びいきだと聞いている

が

「私も日本が大好きです。だから、急ぎましょう」

そのころ、でじこたちは有楽町の駅前に集まっていた。

「大変、アキハバラが・・・」

「うさだ、今はアキハバラどころじゃないによ。この国が滅びるかどうかの瀬戸際なんだによ！」

でじこはみんなに告げた。

「でじこたちの目的はただ一つ、水銀燈を倒してこの国を守ることだよ！」

みんなの心が一つになった瞬間だった。

「ここ有楽町は平田先生と久弥さんがでじこたちのために残してくれた南十字星の見える約束の地だよ。平田先生、久弥さん、そして王様が愛してきた国を守るのにはここにいる15名にまかされたによ。もう一度平田先生に南十字星を出してもらって悪い世の中を終わりにするによ！平田先生の陽明学が正しいと信じるものはでじこについてくるによ！」

全員がでじこに付き従った。みんな理由は違うが国を愛する気持ちは同じだった。でじこやびよこはここで負けたら道明や久弥、王様や杉本侍従長に何と言っておわびをするのか、真紅たちも尊敬していたマスターに顔向けできなくなる。美香は公演場所を失うことになり親友のあかりに何と言ったらいいか。みけは尊敬している「お魚博士」こと尾崎和夫教授に顔向けできなくなる。みんなのマスターや先生が愛した国を滅ぼすわけにはいかなかった。そしてみんなが信じたのは「平田歴史学」とその根本になっている「陽明学」の革命理論だった。世の中を変えたいと本気で願うならば変えることができる、それが「陽明学」だった。

でじこたちは有楽町駅の北側にある東京国際フォーラムにやってきた。するとそこへ水銀燈が現れた。

「あら、誰かと思ったらおばかさんの真紅だわ」

「見るからにいやな奴だよ」

「この火事は貴女のせいね」

「そう、私はあんたたちを倒すためならどんなことだってやる、松岡やネーダーを使つてでも・・・」

「すると今までの騒ぎはお前が諸悪の根源かによ」

「でじこは目からビームを放つたが、水銀燈に外されてしまった。今度は水銀燈が武器を繰り出し、全員を狙う。」

「美香さんあれを使いましょう」

「ミルフィーユ秘書はバズーカ砲を取り出して水銀燈を狙つた。だが・・・」

「ミルフィーユさん、どこを狙つてるによ・・・」

「あれ」

なんとミルフィーユ秘書は前後を逆にしてバズーカ砲を構えていたのである。このおかげで北隣にあつた東京三菱UFJ銀行本店ビルが倒壊してしまつた。

今度はみけが釣竿を振つた。だがみけ自身が糸巻きにされてしまつた。さらに美香とちとせがピストルを構えた。すると発射する前に水銀燈が二人を倒した。美香は水銀燈に突つかかつていったが、逆に跳ね飛ばされてしまつたのである。そこに水銀燈が強烈な攻撃を仕掛けて全員をねじ伏せてしまつた。

「おばかさんたち、アリスゲームの邪魔はしないで・・・」

「お前なんか倒されたら二度と有楽町に南十字星は出ないによ・・・」

「叔父上の・・・夢を・・・守る・・・」

倒れたぴよこは杉本侍従長との日々を思い出していた。

投扇興の名手であつた杉本侍従長はぴよこに投扇興の54手を披露した。中でも最後の54番目の手である「夢浮橋」は杉本侍従長お得意の手だったが、他の者が真似することはできなかった。それゆえに王様は杉本侍従長に「夢浮橋」の号を与えた。ぴよこは杉本侍従長に投扇興の54手の由来を聞いた。するとその日から杉本侍従長はぴよこに「源氏物語」を語つて聞かせた。投扇興の54手は全

部源氏物語の巻名だったのである。ぴよこは次第に投扇興よりも源氏物語に興味を抱くようになった。

「そうたびよ、杉本さんにもらったこれがあるぴよ」

ぴよこは杉本侍従長にもらった扇を取り出した。「夢」の扇を開いて水銀燈に投げつけた。

「あつ」

ぴよこの投げた扇は水銀燈の頭に当たり、ヘッドドレスを切り裂いた。

「おのれ」

「ぴよこもやるによ」

続いて投げた「浮」の扇は水銀燈の肩を切り裂き、「橋」の扇は水銀燈のどに当たった。

「今よ！」

美香が水銀燈にとび蹴りを加え、続いてミルフィーユ秘書も後ろから襲った。

動きの鈍くなった水銀燈にでじこが目からビームを加えてとどめをさし、次いでぴよこの3本の扇によってその首が打ち落とされた。

57、争いの最後

戦いが終わった瞬間、空は晴れて星が輝きだした。

「でじこさん、あれ」

平田先生の南十字星が空に輝いていた。そこへ邦俊たちが到着した。

「でじこちゃん、無事だったか・・・」

でじこは何も言わずに水銀燈の体を指差した。

「こいつか・・・」

「おや？この扇は？」

「夢、浮、橋・・・。杉本さんの扇に間違いない」

「と、いうことは大手柄は侍従のぴよこちゃん」

「そうたびよ」

「これは王様に報告申し上げねば」

でじこと邦俊たちは水銀燈の体を王様の元へと差し出し、王様に事の次第を報告した。

「これが反逆者の正体か……。何とむごい……。」「
王様は立ち上がって言った。

「夢浮橋（杉本侍従長）、花散里、日比谷公園の片隅にこの遺体を
丁寧に葬り、墓を立ててやるがよい」

二人は早速その通りにした。墓の題字は真紅が書いた。

続いて王様による「論功行賞」が始まった。

「この度の戦においては水銀燈の首を取った花散里を功名の第一とし、勲一等旭日大綬章を与えて、侍従上席に昇進させる」

「王様、びよこは勲章よりお金が欲しいびよ」

「なお、花散里には勲章の副賞として御下賜金一千万円を与えるものなり！」

「びよー！」

「さらに、夢浮橋（杉本侍従長）から賜った「夢」「浮」「橋」の3本の扇の他に、私が「舟」「姫」の2本を新たに書いて下げ渡すこの字には意味があつた。「夢浮橋」は杉本侍従長の号だが、「浮舟」とするとかつてみんなの先生だった「うさだあかり」の号に、「橋姫」とするとミルフィーユ秘書の号になる。

「びよこちゃん、ありがたく受け取るがよいぞ」

この他、でじこには銀杯3個、ぷちこには銀杯2個などが贈られた。

焼け野原になった日比谷公園には続々と木が植えられたが、問題は東京国際フォーラムの扱いだった。北隣にあつた東京三菱UFJ銀行本店ビルが倒壊し、でじこたちとの戦いで内部もめちゃくちゃになつていたのである。

そこででじこは有楽町駅に久弥が設置した大黒様にお伺いを立てることにした。

神託の結果は「本日午後7時、人形楽団に演奏をさせよ、我が答えを天に示そう」

その夜、でじこたちは真紅たちに有楽町駅前で演奏をさせた。すると、空に南十字星が現れ、次いで細長いビルのような形に星が並んだ。星の光は駅の北、東京国際フォーラムの方向へ向かった。

でじこたちがその光の元へと走っていくと、そこには一つの銅像があった。それは、かつてこの地に東京都庁があったとき、正面玄関にあった太田道灌の銅像であった。

「これは……。叔父上はこの地に東京都庁を再建せよとのお告げだ」

「久弥さん、あんなに立派な建物にいたのにかによ？」

「じいさんは都庁新宿移転に最後まで反対していたし、叔父上も本当は反対だったんじゃないかな。さっきの細い建物の形はかつてここにあった旧東京都庁にそっくりだったし、この銅像はその正面玄関にかつて置かれていたものだ」

「わかったによ、でじこはここに東京都庁を建設するによ」

こうして都庁は再び有楽町に戻るようになった。

気の早いでじこは現場で陣頭指揮を取りながら久弥さんの夢見た世界を作ろうとがんばっていた。しかし、まだまだ陽明学の世の中になるには長い道のりがあった。誰もがその才能に応じて活躍できる世の中になるにはもう一段の時間とある人物の出会いが必要だったのである。

58、アイドル「Mint」デビュー

3カ月後、新東京都庁の建設は順調に進んでいた。太田道灌の銅像とともにでじこを導いた元東大教授・平田道明の像も完成した。ただでじこが一番尊敬していた道明の息子、元東京都知事・平田久弥の銅像は作られなかった。これは久弥が亡くなるときにでじこたちに自分の銅像は作るかと予言していたからである。

「それにしてもなぜ久弥さんは銅像を作ると言ったのかによ？」

「お父様は神格化されることを恐れていたのですわ」

でじこが振り向くと小さいが芯の強そうな女の子が立っていた。

「ミ、ミントさんによ・・・」

「ミント？誰のことかしら？」

そこへミルフィーユ秘書が走ってきた。

「あー、困りますよ、勝手に出歩いちゃ」

「あら、私は平田久弥の娘ですわ、文句あるかしら？」

「とにかく早く戻ってください」

でじこは驚いた。

「久弥さんの娘かによ？」

「はい、平田久弥の娘、文子と申します」

「平田一族は男は立派な人が多いけど、女は変なのばかりだよ」

「あーひどいです」

「ミルフィーユさん、有楽町の戦いの時に少しでも役に立ちましたかによ？」

「ミルフィーユ？変わった呼び名ですわね」

その時、でじこの妹分のぷちこが文子をたいた。ぷちこが示した写真には確かにでじこことぷちことミルフィーユ秘書と一緒に自分も写っているではないか。

「まあ、私にそっくりですけど・・・」

「もしかしてそれは宇宙であった・・・」

「そうにゆ、こいつそっくりの「ミントさん」がいたにゆ」

「ミント・・・それ素敵ですわ」

文子は新東京都庁のテーマソング「夢の街・有楽町」のキャンペーンに来ていた新人かけだしアイドルだった。しかし本名でデビューするには名前が固すぎるので芸名を考えていたのだと言う。

「『Mint』、これいいですわ、そう思いませんか？」

「素敵です」

「うむ、伯父上も自分の威光がかかるよりその方がいいと言っただろ」

「ありがとう、そういえば貴方のお名前は？」

「ぶちこにゆ」

「ぶちこさん、ありがとう」

文子、いや「Mint」は新都庁の1階で初ステージを踏んだ。

「すごいによ」さすが平田一族だによ」

「驚くのは早いわよ、この歌は作詞作曲もこの子が手がけたのよ」

「さすがは久弥さんの娘にゆ」

59、小杉首相の構造改革

さて、このころ、でじこは東京都庁の建て直しに奔走するため総理の座を降りていた。

でじこの後には麻生前総理の腹心だった小杉隆信が総理となっていた。小杉総理は麻生前総理の考え方を受け継ぎ、「構造改革」と称して外資の導入など積極的に規制緩和を行っていた。だがこれを苦々しく思っている人物がいた。平田教授の孫、平田邦俊、そう、「Mint」のいところである。このころ邦俊は公職を退いて三菱重工の営業マンとして働いていた。邦俊は企業の幹部と会うと必ず相手に聞くことがあった。

「あなたは小杉総理を支持しますか？」

「あなたは仕事に信用が大切だと思いますか？」

ほとんど全部の人は小杉総理を支持するが、信用を大切にすべきと言った。だがそんな人を邦俊が信用することはなかった。なぜならでじこが邦俊にこういつていたからである。

「小杉のやつてることは一見自由に見えて実はこの地球で一番大切な信用をぶち壊しているだけによ！」

でじこの目は正しかった。「小杉政策」は信用のあまり必要ないアメリカ社会を日本に持ち込み日本の信用を壊しているだけだった。そうなる小杉総理を支持するならば信用は必要ないと言わねばならないし、信用が必要だというならば小杉総理の抵抗勢力にならねばならない。でじこには小杉総理を支持している人たちが「信用第

「」などといっているのがとても信じられなかった。企業トップのほとんどはうそつきとさえ言っていた。邦俊が三菱重工に入社したのは三菱重工の谷口社長が小杉総理の抵抗勢力として戦う考えを示していたからだった。だがトヨタが小杉政権を支えていたので三菱重工は左前になっていた。三菱重工が抵抗勢力となっていたのには訳があつた。三菱重工の成り立ちは長崎にあつた幕府の造船所を発祥とする。明治になり坂本竜馬の海援隊を引き継いだ岩崎弥太郎がおこした海運会社が「三菱商会」だった。岩崎は客へのサービスと共に従業員を大事にすることを基本方針としたのである。海運会社「三菱商会」は後に合併して「日本郵船」となつて現在に至るのである。「人を大切にする三菱」その伝統は三菱の強さを支えてきた。それ故に三菱重工もアメリカ流のドライなやり方をするわけにはいかなかった。

しかし、三菱グループでも一枚岩ではなかつたようだ。三菱重工の考え方に賛成したのは三菱マテリアル、ニコン、日本郵船、キリンビール、三菱化学、旭硝子などで

三菱東京UFJ銀行は筆頭株主がトヨタグループであることから小杉政権の後ろ盾に加わり、三菱重工と対立した。このグループには三菱商事、三菱自動車、三菱地所、東京海上、新日本石油が加わつた。人々はこれを三菱のお家騒動と呼んだ。しかし実際は三菱どころか日本中のあらゆる大企業が重工側と銀行側に分かれたのだ。銀行側にはトヨタグループやフジテレビ、読売、京王、西武鉄道などが加わつた。特筆すべきは小田急電鉄が真つ先に三菱重工支持を表明した。鉄道会社の中では最も旧三菱銀行に近い小田急が銀行を見捨てて重工に味方したのだ。これに京浜急行、相模鉄道、京阪電鉄、阪神電鉄、住友系の会社などが参加した。上本町のお藤元、近鉄は名鉄と共に中立を宣言した。

「人を大切にするグループと金を大切にするグループに分かれたに
ゆ」

「また大騒ぎが起こるじゃない」

「邦俊さん、大丈夫かによ？」

だがMintは落ち着くようにいった。

「まだ騒ぎが始まった訳じゃありませんわ。邦俊さんが三菱重工にいる限り、上本町におじい様の南十字星が見える限り、望みはあります！」

Mintが言う南十字星とは大阪の上本町の空に見えるという伝説の南十字星だった。

その頃、上本町では本当に暴動が起こっていた。三菱重工グループ（重工派）と三菱東京UFJ銀行（銀行派）との社員の争いから小競り合いになった。上本町は関東以外では三菱東京UFJ銀行の旧2行の支店がそろって珍しい街だった。交通の要所だったため集まる人も多かったが、些細なことから暴動になってしまい、多数の負傷者がでた

60、上本町の悲劇

邦俊はでじこたちに三菱重工について話をしていった。三菱重工は船は「戦艦武蔵」、飛行機は「ゼロ戦」、機関車は「D51」が代表作だが、関門トンネルの掘削シールド、原子力発電所の建設などもやっていた。邦俊は伯父、久弥が道明の功績を語り継ぐために結成した「ラブソドス団」の団長でもある。語り口はでじこたちを飽きさせることはなかった。その夜、でじこたちは上本町で大規模なデモがおこったことを知らされた。先日の暴動では警察が銀行派だけ優先的に助けたため重工派の社員たちに被害が拡大してしまった。これに怒った重工派の社員たちは平田道明・久弥・でじこの写真を掲げて上本町で大規模なデモを行ったのである。三菱重工本社ではその知らせが入ると喝采の声が響いたが、デモ隊も平田一族が重工社員だということが伝わるとすぐにでも来てくれと言う声が上がった。

翌日、谷口社長は自ら邦俊を引きつれ上本町にやってきた。Mintもでじこたちも一緒だった。

「まさか、平田先生の孫がわれらと同じ重工社員だったとは」

「みなさん、私が重工社員であるということは、重工が銀行に負けるならば平田の歴史学が、上本町が消滅すると言うことです。平田の歴史学を信じる人は重工の勝ちを信じてください」

「金だけの奴が勝ったためしがないによ！」

デモ隊は6万人に達し、上町筋から天満橋へ、淀屋橋から梅田へと続いた。

だがこれが悲劇を招いた。梅田は銀行派の三菱地所の土地だった。

ここで重工派と銀行派が衝突した。この有様を見ていたMintは、かつて父・久弥が言っていたことを思い出した。

「お父様、もし日本が共産主義になったら、日本はソ連のように悲惨な国になってしまいますわ」

「文子（Mint）、ソ連や中国の共産主義は本物とは違うぞ。発展途上国で共産主義などやってもそれは本物にはならない。本当の共産主義というのは日本のように先進国、経済大国から起こるものだ。格差が広がれば階級闘争が起こる。その結果として共産主義が生まれるのだよ」

Mintは久弥の目には100年先の未来でも見ているような気がしてならなかった。

「でも、お父様の言われたことは100年どころかわずか3年で本当になりましたわ」

「伯父上の考えは階級闘争を起こさせる気だろう」

「邦俊さん！」

「Mint、これからすごい速さで世の中が変わっていくぞ！伯父上の予言どおり、でじこちゃんがこの国を救うかも知れん。それをじいさんたちと一緒に六甲山の空の上から眺めていることだろう」
三菱重工でのじこの人気はすごかった。それまで固い企業のイメージだった三菱重工がでじこことぶちこをイメージキャラクターとして採用したのだった。しかもCMソングはMintだった。

61、今村光文の「極道辻説法」

下関でコーヒーを飲みながら三菱重工のCMを見ている男がいた。元、水産大学校校長・尾崎和夫の長男、尾崎守道と守道にあずけられたでじこの友人、みけだった。この男、尾崎守道も変わり者である。常に着流しを着て暴れまくり「唐津の無法松」の異名すら取ったが、なぜかコーヒーだけは欠かさなかった。守道が飲むコーヒーは決まってエクアドル産の「カフェ・アンデス」だった。そこへ一人の修行僧が現れた。

「久しぶりじゃのう、守道」

「先生！」

守道が先生と呼ぶ修行僧の名は、今村光文といい、旅をしながら世界中で悪い奴らを懲らしめている僧侶であった。下関に近い防府市の出身で予科練では尾崎和夫の後輩である。その後江戸の魚市場や大洋漁業で働いた後に出家。しかし魚市場の熱い血は抜けきれず「破戒僧」として知られていた。

「久しぶりに日本に帰ろうと思つてな」

そういうと、光文は新聞記事を差し出した。それは旧字体も使っており、いかにも昔の古い時代の新聞のようだった。しかし日付は先月の日付である。新聞の題字は「らぶらた報知新聞」と書いてある。その昔、報知新聞は現在のようなスポーツ新聞ではなく読売とは独立した普通の新聞紙であった。創立者は郵便制度の創始者、前島密である。世界中に支局を置くのは新聞社の使命だが、報知新聞も例外ではなかった。昭和初期にアルゼンチンのブエノスアイレスに報知新聞が支局を置き、現地日本人向けに新聞の発行を始めた。題名はブエノスアイレスを流れるラプラタ川から取った。それが「らぶらた報知新聞」である。やがて戦争が起こり、南米は戦火からは免れたが日本との連絡が取れなくなったため支局は本体から独立し「らぶらた報知新聞社」として現在に至るまで新聞を発行し続けている。でじこたちが国連総会に出席している時、光文はブエノスアイレスにいた。

「この「でじこ総理」に会いたくてな、日本に戻ってきたのだ。何

か物の怪でもついているのは間違いないと思つてな、地球の裏側から電話をかけるにも大変だし」

インフレが激しいアルゼンチンでは電話はあらかじめ「トークン」と呼ばれる電話専用コインを購入しなければ電話をかけることはできない。電話料金の値上げが激しいため値上げの都度、機器を改修していると大変なことになる。そこで電話専用のコインを用意しておき、それを売店で販売する方式にしたのである。これなら電話料金が変わってもコインの販売価格を変えるだけでいい。物価が不安定な国で多く使われており、フランス、イタリアなどでも同じように電話用コインが売られている。

「しかしそのいくさはすでに終わっております」

「そうか、わしには戦が起こる気がするが」

「起こるみゃ！金と人との戦があるみゃ！」

そこへ上本町での騒動の知らせが入った。

「これは、急いで大阪に行かねばならないな」

「そうじゃろう」

一方、M i n t は大阪フェスティバルホールでコンサートの最中だった。

振り付けは美香が行い、衣装も次々変わった。大胆な大人の女性ファッションから最後にはシルクハットにタキシードまで着こなすM i n t にどきどきだった。

「久弥さんは地味だったのに・・・」

「アイドルは派手によ」

でじこは女優になりたがったが、それは女優が支配者になれるとでじこ自身が勘違いしていたのである。道明・久弥親子に限らずでじこの才能を見抜いた人たちはでじこに政治家になることをすすめたのである。久弥の親友だった杉本侍従長もその一人だった。久弥はでじこに「水滸伝」「三国志」「史記」「封神演義」を教えたが、久弥亡き後はでじこが自分で続きを読んでいた。あるとき杉本侍従

長がびよこに源氏物語や枕草子を読み聞かせているとでじこも混ぜたいと言ってきた。そこで杉本侍従長はでじこには別に平家物語や太平記を読み聞かせた。さすがは杉本侍従長である、二人の性格を見抜いていた。びよこには上品で優雅な生活をさせ、道明の好んだ源氏物語を与えた。一方でじこには平和の尊さと世の無常を説いた。ことに太平記は久弥が好んだ物語である。しかし、でじこが一番好んだのは水滸伝であった。

「あの星の中には久弥さんもいるんだによ……。久弥さん、お願いだよ、でじこの元に108個の星を取ってきて欲しいによ……。水滸伝の梁山泊がどこかにないのによ……。宋江はいないのによ……。」

名古屋駅セントラルタワーズの前庭で星を眺めながらでじこはつぶやいた。

すると、でじこの目の前で老人の僧侶が若者相手に杖を振り回して暴れているではないか。

「魯智深によ……。水滸伝の花和尚・魯智深によ……。僧侶は若者たちを一喝した後、杖を収めた。」

「魯智深か……。そう呼ばれるのもひさしぶりじやのう。」

「ほかに誰かに呼ばれたことあったのによ？」

「うむ、わしを魯智深と呼ぶのは日本で一人だけじゃ。東大の平田教授の息子、平田久弥。わしが豹子頭林仲と呼んだその男だけじゃ」「久弥さんが豹子頭林仲……。」

「わしの名は今村光文と言う、ご覧の通りの貧乏坊主じゃ。ところでお前さんはなかなかよい目をしておるのう。かなりの高貴な身分の者と見たが」

そこへ邦俊さんが現れた。

「さすがは光文禅師、年老いてなおその眼力は確かなようですな。お察しの通りこの子は我が祖父・平田道明と伯父・久弥が死に臨んで自らの後継者と定めた平田歴史学正統後継者、シヨコラ・デジキヤラット殿にございます」

「すると、久弥は・・・」

「残念ながら一昨年なくなりました。最後には東京都知事にまで上り詰めましたが」

「そうか、久弥は頭は良かったが、あまりからだが丈夫な男ではなかったのう・・・」

光文はでじこの顔をよく見た。

「それにしてもいい目をしておる。これがつわさに聞いたでじこ総理か・・・」

「禅師、この子は行者武松くらいにはなりますかね？」

「いや、そんなものではとても収まるまい。この子には天魁星がついておる。呼保義の相じゃ、類まれなる人相じゃ」

「呼保義、それじゃ・・・」

「うむ、この子に名をつけるなら及時雨・宋江じゃな」

「宋江・・・」

62、侍従びよこ

そのころびよこたちは王様の宮殿で働いていた。前回騒ぎを起こした水銀燈は王様の侍従、びよこが杉本侍従長からもらった3本の扇で倒した。王様はその功に対しびよこを侍従上席に昇格させて勲章を与え、さらに1000万円の御下賜金を与えたばかりか月給50万円も与えていたのである。そればかりかびよこに付き従った3人の医者、獣医のリクは王様の御料牧場の医者となり、齒科医のカイと内科医のクウは宮殿病院に勤務し、それぞれ月給30万円を王様から頂くことになった。単純合計では合計で月140万円も入ってきたが、彼らは自らのUFOを宮殿南庭に移してそこで暮らすことになった。おんぼろは相変わらずだったが、なにより代々ぜいたくを嫌った王様にはこれがまた気に入られることになった。

そんなある日のことである。クウが宮殿前庭を歩いていると草が生い茂っているのが目に付いた。クウは鎌を取り出し雑草を皆刈り取ってしまった。その夜、クウはびよこと共に王様に呼ばれた。雑草

を刈り取ったからほめてもらえるものだと思っていた。

「内科医殿、どうして宮殿の草を刈り取ってしまったのだ！」

「え？雑草がたくさんあったから……」

「どんな草でも名を持ち意味を持っている、それを奪うことは許さ
ん！」

ほめてもらえると思つたクウは逆に減棒されてしまった。ぴよこは
杉本侍従長に事の次第を報告した。

「なるほどな、陛下らしい……」

「何か知つてるのかぴよ？」

「この国の王様は代々殺生を大変お嫌いになられる。雑草と言えど
勝手に刈り取ることは許されなかった。先代様のときは秋に草が枯
れかかった時に『陛下、そろそろお庭のお手入れをいたしませんと
生き物の成育に支障が出ます』、『あ、そう。来週あたり取り掛かっ
てくれ』と言われた。但しその前に実のなる植物の実は全部落とし
てから掃除を始めることになっているんだ。しかも刈った草はその
まま土の中に埋めて肥料にしなければならなかった。殺生を行つて
人格を破壊することを恐れておられたのだろう」

63、夢の千社札

一方、名古屋では邦俊がみんなを集めて話を始めた。

「このままでは重工側が何もしないまま構造改革が始まり、国民が
苦しむことになる。そこで、明後日からゼネストをやることが重工
で決定された」

「なんだによ？」

「ゼネストとはゼネラル・ストライキのことで、今回のゼネストは
三菱重工に同調する小田急電鉄、東急、ヤマト運輸、日本郵政公社
など282社が一斉にストライキに入る。計画としては1947年
以来60年ぶり、実施されれば日本史上初だ」

「それはすごいによ！」

「でも、電車もバスも止まりますから、人々は生活に困りますわ」

「それもそうだよ」

「さあさ、道明じいさんから伝わった『幻の味噌煮込みうどん』だよー！」

その夜、でじこは夢を見た。

「でじこちゃん」

「なんだによ・・・によー！」

夢枕に現れたのは誰であろう平田道明教授であった。

「これから地上では大騒ぎになるう、この千社札を持って名古屋の近くの豊橋という街を訪ねるがよい。豊橋は決して小さい町ではない。この街から日本を変える力が出る。その千社札の名の人物を訪ねるがよい」

でじこが目を覚ますと枕元に一枚の千社札が置いてあった。

翌朝、でじこはその千社札を見せた。

「普通の千社札なら縦長ですが、これは横長ですわね。名前は「杉浦信義」さんですわ」

「だれだそりゃ？」

「私も存じ上げません」

「とにかくゼネストの日も近い、M i n tの仕事も一段落つくだろうから豊橋へ行って見たらどうだ？」

ゼネストの前日、でじこたちは豊橋に入った。

「本当に何も無い町だよ」

「でじこさん！あれをこらんなさい！」

それは小さなパン屋だったが、看板に「サン・ジェルマン」と書いてあった。

でじこでもその名は知っていた。久弥が生前ひいきにしていたパン屋だったからである。

「久弥さんのパン屋があると言うことは、この町にも久弥さんの痕

跡があるかもしれないよ」

「その通りだ」

後ろで声をかけた大男にでじこは見覚えがあった。渡辺華仁である。かつて久弥は選挙に落選して一時でじこたちのいるゲーマーズアキハバラ店に副店長としてやってきたことがあった。しかしでじこたちが久弥の経歴を知るに至り、でじこたちは何とかして久弥に政治家に戻ってもらおうと願うようになった。そんな時に久弥の政治家時代の親友だった渡辺華仁が久弥に都知事選立候補の話を持ってくるのである。でじこが選挙を手伝った結果、久弥は都知事に当選した。

「そういえば渡辺さんの故郷は豊橋でしたわね」

渡辺華仁の曾祖父は明治初期の日本画家、渡辺小華である。彼は幕末の日本画家渡辺華山の次男として生まれ、父の死後田原藩家老職を継ぎ、廃藩置県までその職にあった。廃藩置県後は父の作品を持ち、父が歩んだ日本画家の道を歩んだ。

だが、時は文明開化の世、日本画が世に受け入れられる時代ではなかった。彼は貧困のうちにこの世を去るが、彼が育てた弟子たちは日本各地で終戦に至るまで活躍し続けた。現在でも豊橋市博物館では渡辺華山・小華親子の作品を目にすることができる。渡辺小華が絵を描くために作らせた筆は後に伝統工芸品・高級筆「豊橋筆」の母胎となった。渡辺華仁は早速でじこたちを連れて市役所に掛け合ってくれた。しかし市役所は個人情報保護法を盾に調査に協力してくれなかった。

翌日、早速ゼネストで日本中に混乱が起きたが、JR東海は銀行側に属していたためゼネストには参加しなかった。名鉄は重工側に属していたが大規模なストライキで国民に迷惑をかけるのは自分たちの主張が正当だとしても許されることではないと考え、ゼネストには参加しなかった。これに小田急や近鉄も同調し結局鉄道会社でゼネストに参加したのは阪急電鉄1社にとどまった。このため豊橋で

は大手企業の工場がいくつか止まったことと、港や船で働いている港湾労働者たちがストライキを起こしたのを除いては町は至って平静であった。ゼネストではじこたちも動きようがなく、豊川稲荷へ観光に出かけた。ここは稲荷寿司発祥の地である。もともと庶民的な食べ物を好んだ久弥は豊川の稲荷寿司を好んで食べていた。すると60代とおぼしき頭の白い男性が隣に座ってきた。

「ゼネストで、あんたらもお参りにきたんきや？」

「ホテルにいてもしょうがないから来てるによ」

「本当は人探しに来たにゆ」

「人探し？どんな人探しとるん？」

「この千社札が頼りによ」

老人は千社札を見ると表情が変わった。

「この千社札、誰にもらった？」

「でじこの夢の中で平田先生が置いていったによ」

「平田？まさか東大教授の平田道明先生やないやろね？」

「ひよつとしておじい様をご存知なのですか？」

「おじい様？するとあんたは？」

「私は元・東京都知事・平田久弥の娘、平田文子ですわ」

「久弥の？それやったら、あんたは平田先生の孫娘か？ええとここで会ったなあ。わしの名は杉浦信義、豊橋の杉浦工業の社長や」

64、産業技術記念館の災難

杉浦は早速工場へ向かおうと豊川駅へ向かった。しかしそこへ渡辺がかけてつけた。

「申し上げます！産業技術記念館がデモ隊により破壊されました！」

「なんですとによ！」

生前の久弥が定めていた4つの聖地、有楽町の大黒様、阪急梅田駅のコンコース、阪急三宮駅、そして名古屋栄生の産業技術記念館だった。久弥は困ったことがあったらこの4箇所のどこかに行けば知恵を授けると言い残していたのである。

ところが阪急梅田駅のコンコースと阪急三宮駅はすでに現存せず、

今また産業技術記念館が破壊されてしまった。直ちにでじこたちは名鉄豊川稻荷駅から列車に乗った。幸いにもこの駅からは岐阜まで直通列車が出ており、栄生まで直通でいけたのである。でじこたちが産業技術記念館に到着した頃にはもう日が沈んでいた。

「ひどい・・・」

「久弥さんの夢を育てた場所がなくなってしまったによ」

「これで久弥さんにつながる糸がなくなってしまったわね」

「そんなことありやせんがね」

杉浦は暗くなつた館内を指差した。するとどこからか、カタタという音が聞こえてきた。その音はだんだん大きくなっていった。

「え？」

「この音はなんだによ？」

産業技術記念館に保管されている豊田G型自動織機が一斉に動き出したのだ。

「ここで自動織機が動く限りは久弥の魂が生きとるがね」

「まさか？ここにある機械ってほとんどが80年以上前の機械ですよっ？」

「うさだ、久弥さんがここに夢を求めたのは、ここにある機械は100年以上たつても動き続けるからだによ」

「お父様も言つてました。日本の機械は100年以上たつても現役で使えるものが多いと。それが日本の技術のすばらしさであり、世界に誇るべきものだ」と

M i n t は南側にあつた旧豊田商会事務所跡のほうへ走つていった。

「M i n tさんどこへいくによ？」

「ありましたわ」

旧豊田商会事務所跡の脇にぶなの木が3本植えてあつた。

「お父様の植えたぶなの木も無事でしたわ」

「久弥さんが植えた木かによ」

「でも、なんでぶなの木なの？普通植樹と言えば松や杉の木じゃない？」

そうつさだが言うとM i n tは逆上した。

「なんですって？お父様の歴史学者の知識を疑うなら許しませんよ！」

「そういうわけじゃ・・・」

「正三位勲一等・元東京都知事・平田久弥の実力をお疑いになるのですか？」

「久弥さんのことだよ。何か考えているに決まってるだよ」

「そうですね。お父様は針葉樹ではなく広葉樹を好んで植えていました」

「・・・なあ、文子。荒地を再生するには3つの段階がある。一つは雑草を育てる段階、雑草は水と土さえあればどこにでも生える。次に松や杉など針葉樹の林の段階。針葉樹は日当たりさえ良ければ育つ。そうして土に養分が蓄えられた段階で最後に広葉樹の林を作る。広葉樹は暖かく水があり土に養分があれば日当たりはあまり関係ない。広葉樹林は栄養が豊富だから昆虫やきのこ、野生動物たちの楽園になるぞ・・・」

「さすがは久弥さんによ・・・」

「お父様のような歴史学者は100年以上先のことまでお考えになるものですよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3098t/>

デジキャラット・シンフォニー4

2011年5月16日13時57分発行